

虚子記念文学館投句特選句

・令和七年八月

稲畑廣太郎 選

俳磚の詩ひびきゐし月の庭

京都

西村やすし

タイガース勢ひ止まらぬ夏の陣

兵庫

涌羅由美

道の辺の赤のまんまに日の遊ぶ

兵庫

河野ひろみ

鈴虫や闇の帳が籠となり

東京

清水ぽっぽ

女より酒より俳句好きの秋

神奈川

進藤剛至

日盛の光の余白動き出す

兵庫

奥田好子

虚子館の冷房を我独り占め

新潟

安原 葉

夏の名残蹴つてあらゆる窓開ける

千葉

鹿野川小舟

ブルーギルばたばた秋の湖で

滋賀

太田 慈

暑き日の緑流るゝ燦々と

神奈川

朗哉月善作

(青少年)

入選句・令和七年八月

トマト挽ぐ生まれ変はらば雲がいい	大阪	押見げばげば	八年ぶり古書を開けば紙魚の逃ぐ	愛知	海神瑠珂
梅干や空瓶に祖母のたましひ	富山	三河三可	一匹が千となりたり赤とんぼ	茨城	杉山 満
先生と小さく呼んでみて残暑	兵庫	岸川佐江	水打てば路地に生まれる風ひとつ	埼玉	吉田春代
仕分けたる葉書の山や百日紅	兵庫	永沢達明	一玉の西瓜で遊ぶ子象かな	兵庫	瀬戸 橙
平面を立体に見せ揚花火	京都	山崎貴子	西瓜喰みながら身の上話聞く	兵庫	瀬戸幹三
師の忌日近しと仰ぐ百日紅	大阪	林 曜子	白粉の花の乱せる境界線	大阪	河辺さち子
雲の峰真下に落つる亭午の日	兵庫	辻田あづき	炎天の木洩日に幻を見し	兵庫	池田文子
幼な名を行司が告ぐる宮相撲	兵庫	辻 桂湖	初秋に禅師よきかなと喜べり	大阪	富永武司
清々し新横綱の土俵入り	徳島	多田まさ子	廊下ゆく影の一つや迎鐘	兵庫	足立朱麻
一卷の一軸解き土用干	大阪	多田羅紀子	頼もしき聴導犬と生くる秋	大阪	森重深鶴
八月や親子の試練始まりぬ	兵庫	深尾真理子	人の欲七夕笹にぶらさがり	兵庫	山崎渺美
虚子館の庭蟬時雨蟬時雨	鳥取	棕 則子	群れ咲いて葉に影落とすカンナかな	兵庫	山岸正子
夏帽をとり松風を浴ぶ芦屋	石川	辰巳葉流	真青なる空かけ昇るカンナかな	兵庫	今井哲子
芦屋川旱の苦より免らず	鳥取	棕 誠一朗	産みたての卵届きぬ花カンナ	兵庫	大西美知子
風に棲むための空蟬なりしかな	岡山	石井宏幸	鳥眠る島のしじまや星祭	兵庫	西尾登志子
ままごとは我が家の縮図赤のまま	大阪	西尾浩子	カンナ燃ゆ廃線の寂び知らずして	兵庫	道中義臣
遺されし庭に晩夏の静けさよ	兵庫	玉手のり子	夏帯をきりと締めて句座の席	兵庫	高橋純子
洗ひたる硯に願ふこと一つ	鳥取	前田 千	虚子記念文学館や秋めきぬ	兵庫	藤井啓子
駅出でて早や炎帝のお出迎へ	兵庫	槌橋眞美	星月夜白猫ゆるり路地に入る	兵庫	高市敦之
蜘蛛の編む糸に天頂ありにけり	三重	水越晴子	教務日誌八月十五日の余白	滋賀	近江堇花
八月の臨時国会もつれ合ひ	埼玉	小田毬藻	ひぐらしやベーターヴェンを二百字で	兵庫	風待フテ
終戦の日の黙祷の甲子園	石川	白根寿子	日本海浄土へいざなふ大西日	兵庫	福田光博
人散りし跡も花火の闇匂ふ	兵庫	松本 敬	雲梯の片手離せば天高し	兵庫	天下明太郎
風の盆夜風に遠き胡弓の音	奈良	堀ノ内和夫	祖父のこと知らぬ八月十五日	兵庫	伊集院秀樹

七夕をまたと祈りし母の筆	神奈川	小林 心
沖縄の初優勝や秋高し	熊本	貴田雄介
家族みな虚子を訪ねて盛夏かな	千葉	石田義廣
罪のごと深き割れ目の西瓜かな	神奈川	平野孤舟
今朝の秋地球は未だ冷め止まぬ	兵庫	岩水ひとみ
秋の蚊に糖尿の血を食られ	和歌山	中島紀生
未知の地に未知の文明クシュの秋	兵庫	町田葦たか
終戦日黙禱杖にすがりつつ	兵庫	安橋興二郎
明智薙より佇つ堤大文字	京都	杉森大介
水澄みてあぶくの出どこ見てをりぬ	滋賀	太田怒忘
熱帯の臭う切りロパイナップル	静岡	いたまき芯
夕焼や瀬戸内海の水平線	愛媛	星月彩也華
ノーモアを呟きし祖母秋彼岸	神奈川	斉藤苑子
稲妻を神の黙示と覺えたり	兵庫	惠島祥一朗
足元を合はせ加はる踊の輪	石川	辰巳昌彦
飛火野やヌシは角伐免れて	奈良	豚々舎休庵
引き際が肝心だよねつくつくし	兵庫	太平楽太郎
叢を叩きつつゆく捕虫網	兵庫	キートスばんじょうし
星の夜や終着駅に君を待つ	兵庫	矢車星風
西瓜食ぶ食りつきて種ともに	東京	宮村土々